コヾモの鏡

（先帝御製拜誦記）

井上賢順謹著

特100
533
270
332

始

鏡

打むかふ度に心を
みがけとや
かゞみは神の造り
初めけむ

（先帝御製）

特100
533

○明治天皇御製　その一

重荷ひく車の音ぞ聞えける
照日のあつさ堪がたき日に

家の中に居ってさへ、夏は隨分あつい、よく人は『あつくて晝寢もろくゝ出來ぬ』などとこぼしますが、無論これは贅澤です、炎天に晝寢どころか重荷を載せた車を汗たらゝで引いてゐる人もあります、千代田の城の奥に在した先帝におかせられては、あついゝ夏の日にお壕をこえて御耳に達する荷車の音を聞召されたのでございませう。

（一）

大正
1. 9. 24
寄贈

井上賢恒　寄贈本

○明治天皇御製　その二

たちつゞく市の家居はあつからむ
風の吹き入る窓せまくして

村里とはちがつて、都會では廣々と家屋敷を構へることは出來ません、よし廣々と構へたにしても、いろ〳〵な理由から戸締を嚴しくして窓も思ふ存分開放つことは出來ぬ、まして裏店に住んで居る人々はホンの小風呂敷位の窓から風を入れて夏を過すところも澤山あります、かゝる裏店に住んで居る人々にまでも御同情を垂れたまはれたお歌です。

○明治天皇御製　その三

くろがねの舟もたやすく動かして
つよきは水の力なりけり

一雫の水は見てる間にも蒸發えて影も形もなくなります、けれどもその一雫の水が百も千も萬も、またそれ以上數へきれない程集まつて大きな海のやうになりますと、小山のやうな鐵で造つた舟を平氣に浮べてゐます、水の力の強さはお話になりません、私共も一人一人では極めて力の弱いものですが、澤山の人が力を一所にすると大した働をします。

○明治天皇御製　その四

過をいさめ交して親しむが
まことの友の心なるらむ

楽しい時や面白い時にばかり仲がよいだけでは、まだ〳〵ほんとうのお友達とは言はれません、人間は神様でもなく佛様でもない以上たれでも過のあるもので、時によるとそれを自分で氣づかぬ事もあるのです、こんな時に『それは悪いこんなにしたらどうか』と、親切に諫め合ふのがほんとうのお友達といふものです、實に味の深いお歌ではありませんか。

○明治天皇御製　その五

人はたゞまことの道を守らなむ
高き賤しきしなはありとも

あの人達は身分が高いから、一寸爲る事でも上品にあるが、われ〳〵は賤しい者であるから、少し位は悪いことをしても別に差支はあるまいなどゝいふ考を起してはいけません、たとひ大臣大將であらうとも、曲つた心を持てゐては一日でも此世の中で名譽を保つことは出來ぬ、奥田舍の貧乏人でも誠の道を守れば、これが神佛や天子様の御意にかなひます。

○明治天皇御製　その六

よしあしを人の上には言ひながら
身を顧りみる人なかりけり

口の悪い友達が二人でも三人でも寄ると、すぐ誰々は善いが誰々は悪いと、人の事を彼是悪口するが、それならば悪口してゐる本人はどうかと見ると、決して立派な人とはいはれない、却て世間から爪彈されてゐる位の者である、自分の事をば棚に上げて人の事ばかり咎めだてする人は實によろしくない、此の御歌を讀んだ人はよく〳〵覺らねばならぬ。

○明治天皇御製　その七

やすくしてなし得難きは世の中の
人の人たる行ひにして

とても出來まいと思つた南極探檢も、やつて見れば出來ぬことでもない、飛行機が立派になつたら空中を鳥のやうに飛ぶことも出來るに相違ない、然るにそれよりも一層難かしさことがある、それは私共が世の中に立つて人の道を守ることです、人から指を指されないだけでも難かしいのに、まして人から賞められるやうにするのは一層難かしいことです。

○明治天皇御製　その八

こゝろある人のいさめの言の葉は
病なき身の藥なりけり

私共は病氣にかゝると、早速お醫者様に診察して貰つてお藥を頂戴します、これは申すまでもなく一日一刻たりとも病氣を無くして健康な身體になりたいからでせう、それは身體の病氣にかゝつた時のことであるが、たとひ病氣はなくとも心の曲つたものは、これも亦た一種の病氣です、此の病氣はお醫者様よりも、親切な親やお友達の諫めて癒ります。

○明治天皇御製　その九

ともすれば搔濁しけり山水の
すませばすます人の心を

昔から人の心を鏡や水にたとへてある、塵一つかゝつてゐない鏡は、どんな物でもそのまま映します、濁らずに止つとしてゐる水でもやはりさうです、山水も手を入れぬうちは澄んで鏡のやうであるが、一度搔き亂せばもはや影も見えぬ、癇癪や腹立まぎれになつた時の人の心が恰度それです、親を怨んだり兄弟を恨む心などはこんな時に起ることです。

○明治天皇御製　その十

つもりては拂ふ方なくなりぬべし
塵ばかりなる事と思へど

大掃除の時に天井裏などに上つてみると驚いた塵埃です、毎日々々掃いてゐる疊でさへ叩けば驚いた塵埃です、毎日々々打拂をかけてゐる障子でも一日か二日ばかり休んでごらんなさい大變です、よほど注意して拭掃除を毎日缺かさずやらねばなりません、一寸した惡い事だと油斷してゐると後に取返しがつかぬやうになる、私共の今日の仕事は皆これです。

○明治天皇御製　その十一

何事も思ふがまゝにならざるが
かへりて人の身の爲にこそ

誰れでも不自由なことは大嫌ひです、それでは氣隨氣儘に何でも出來るとなつたらどうでせう、うんとお菓子をたべたら腹痛を必ず起す、欲しいと思ふ程お錢が俄かに出來たら働く氣は起らない、何事も思ふまゝにならぬので却て仕合せである、思ふまゝにならぬからといつてやけを起す人と、一生懸命に働く人とある、私共はどちらを學びませうか。

○明治天皇御製　その十二

世の中の人におくれを取ぬべし
進まぬ時にすゝまざりせば

夏の日中は誰れも暑いでせう、冬の夜半は誰れも寒いでせう、誰れも暑くて閉口してゐるから自分も晝寢をしやう、誰れも寒くて閉口してゐるから自分も炬燵に入らう、こんな調子では立派な人にはなりかねる、これはたまらぬと人の弱つてる時には、こゝが辛抱だと自分は勇氣を皷して進まねばならぬ、弱り込んでしまへば何時までも人の臀につくばかり

○明治天皇御製　その十三

おのが身を修むる道はまなばなむ
賤がなりはひ暇なくとも

學問といふものは小學から中學、中學から高等學校、高等學校から大學へといふ調子に進んでゆけばゆくだけ上達するものである、もしかし學問がいくらあつても人間の道を履み行へぬ者もある、學問と人間の道とは別になつてゐるやうにある、たとひ學校にはゆけずとも、また自分の仕事が忙しからうとも、人間の道だけは一時も忘れぬやう學ばねばならぬ。

○明治天皇御製　その十四

國のためいよ〳〵つくせ千萬の
民のこゝろを一つにはして

よく氣を注けてごらんなさい、一家の者が心を合せて一生懸命に勉強する家は必ず富み榮えてゆきます、はなれ〳〵になつて親のいふことを子が聞かず、子のすることに親が同情しない家は決してうまくゆくものではない、村にしても郡にしても、大きく一國についていつてもまたその通りです、吾々日本國民は心を一にして國のために盡くしませう。

○明治天皇御製　その十五

賤がすむわらやの様を見てぞ思ふ
雨かぜあらき時はいかにと

東京には藁屋はありません、してみると先帝が藁屋を御覽なされたのは大演習の場合などでありませう、千軍萬馬の駈けめぐるを御覽なされてゐる時に、ふと田の中や林のほとりに小ぽけな藁屋のあるのが御眼に止つたでこそあらう、雨風あらき時はいかにと御案じ下される大御心をしのび參らせると洵に有り難いことではありせんか。

○明治天皇御製　その十六

いかならむ事に逢ひても撓まぬは
わが敷島のやまとだましひ

『ならぬ堪忍するが堪忍』と、よく昔から人のいふことであるが、なる堪忍は誰れもする苦しい時、辛い時、殘念な時、腹の立つ時、こゝが堪忍のしどころだと思つて、じつと持ちこたへる、それと共に、今がやる時だと思つたら暑いの寒いのといふ位なことにはびくともせず、十分に勇氣を振つて仕事にかゝるこれが大和魂の大和魂たる所以です。

○明治天皇御製　その十七

久しくも我が飼ふ駒の老いゆくを
惜むは人にかはらざりけり

一天萬上の大君から御覽なさると、此國の人民ばかりが可愛相に思召されるのではない。苟くも此國に生きとし生ける犬も猫も亦不憫であると思召めされる、まして、すわ一大事といふ場合に猛將勇卒を乘せて敵陣に突き進む軍馬の如きに對しては一層のことです、先帝は『久しく自分の飼つてゐる馬の老いぼれるのを惜しむのは人と變らぬ』と仰せられる。

○明治天皇御製　その十八

寄りそはむ暇はなくとも文机の
上には塵を据ずもあらなむ

學者は朝晩机にもたれて書いたり讀んだりするのが仕事ですが、その他の人はそんなわけにはゆかぬ、軍人は軍人、お百姓はお百姓、それ〳〵毎日急がしい仕事があるものです、やゝともすれば机とは縁遠くなりがちで、つい讀み書きすることを怠る、それは止むを得ないとして、せめて机の上に塵のとまらぬやう一日に一度位はもたれかゝりたい。

○明治天皇御製　その十九

國民のちからの限りつくすこそ
我が日の本の固めなりけれ

世の中のことは何でも可い加減にして打ちやるのが一番いけない、やりかゝつて途中で止した仕事は何の役にも立ちません、半熟の果實はお腹を痛める、生兵法は傷のもとであるとも昔の人はいつてゐる、やりかゝつたら最後までやる、此の元氣が大切である、我が力のあらん限り、またつゞく限り盡すといふ事が日本帝國をきつかりと固めるわけになる。

○明治天皇御製　その二十

あつしとも言はれざりけり沸返る
水田に立てる賤をおもへば

湯のやうに沸きかへる水田の中に立つて、草を取つてゐる百姓の辛さをおもへば、炎天に家の中に居る者は『あゝ暑い』などゝいはれないぞ――先帝の思召の有り難さには何とも御禮の申しやうもありません、東京をはなれて百里千里あらうとも水田に田の草を取つてゐる百姓の辛さは、ちやんと先帝は御承知でございました、恐れ多い事です。

○明治天皇御製　その二十一

照るにつけ曇るにつけて思ふかな
我が民草の上はいかにと

あまり照り過ぎると、もしやひでりがするのではないか、あまり天氣が悪すぎると、もしや大洪水でも出るのではないか、もしもの事があつて人民が難儀をするやうになりはせぬかと、大君の御心は一日たりとも安らかにあらせられぬ、照るにつけても曇るにつけても私共の身の上を御案し下さる御慈悲をおもへば、忠義を一層勵まずには居られませぬ。

○明治天皇御製　その二十二

國を思ふ道にふたつはなかりけり
戰のにはに立つも立たぬも

まゝ世の中には、戰爭がなければ忠義は出來ぬものと考へてゐる者がある、以ての外の不心得である、國を心から思ふ人は、戰場に立たうが立つまいが、仕事の種類で忠義を重くしたり輕くしたりする事はない、戰の無い時は學生は學問に精出し、百姓は鍬に力を入れる、子守はよく子供を守する、これが直ちに忠義となる、國を思ふ道に變りはない。

○明治天皇御製　その二十三

空蟬の世のためすゝむいくさには
神もちからを添ざらめやは

此の御歌の最初の句空蟬といふ字に意味はありません。さて世の人の幸福安寧を進歩させるために、これに邪魔する者どもを打ち平げる戰爭は止むを得ないことである、正義のために起した戰爭には必ず神樣が力を添へて下さるに相違ない、日清戰爭でも日露戰爭でも我が日本の軍隊が連戰連勝したのが論より證據である、正義の軍には敵は無い。

○明治天皇御製　その二十四

天を恨み人をとがむる事もあらじ
わが過をおもひかへさば

よく人は自分の思ふまゝにならぬ時に、あゝ神も佛もないのかと失望落膽して、自分から大切な生命を捨てる者もある、自分の爲すべき事を眞面目にやつたら決して〳〵神佛に見捨られない、やるべき事をやらずにおいてそれで天を恨んだり、他人を恨んだりするのは身勝手なことである、よく〳〵自分の過をおもひかへして、二度と繰返さぬ様に御注意。

270
332

不許複製

大正元年八月二十三日發行

著作兼發行者　東京府下巣鴨二二〇五番地　井上賢順

印刷者　東京市神田區美土代町二丁目一番地　島連太郎

印刷所　東京市神田區美土代町二丁目一番地　三秀舍

父母に
孝に
兄弟に
友に

終